

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 里見修

里見修氏の博士学位申請論文「戦時期におけるメディアと国家——新聞統合の実証的研究」は、戦時期日本の新聞統合というきわめて重要なテーマに、里見氏自身の発掘したものも含めた新資料に新しい視点からの分析を加えて新しい研究展開を示した労作である。学説史的にこのテーマは、内川芳美教授ら東京大学旧新聞研究所による研究が1960年代になされて以来、テーマに重要性に比べ、研究の深まりが必ずしも十分ではなかった。しかし、内川氏らの研究からすでにほぼ半世紀を経て、多くの新資料が発掘され、戦時期についての研究視座も変化をみせた。里見氏は、こうした新資料や変化を踏まえ、弱小新聞の整理統合から一県一紙体制の確立にいたるプロセスが、一方では満州での言論統制の経験を経てきた革新官僚たちの動きによって先導されつつも、他方では経営上の安定化を目指した新聞社自体の自発的な動きに支えられていたことを明らかにした。

本研究の意義は何よりも、そうした新聞統合が、単に上からの国家による暴力的な介入や統制によるものだけでなく、むしろ企業体としての新聞社の側の積極的な関与を通じて実現されていったことを、地方紙の統合を広く検討して明らかにした点にある。著者は言論統制を、その手段や発想の違いに基づいて「消極的」統制と「積極的」統制の2つの範疇に分け、とりわけ後者の諸相を、新聞統合の過程を通じて浮かび上がらせている。すなわち、各新聞社が、権力の抑制や規制、介入や誘導の力学と一面で共鳴しながら、いかにして同調造出のプロパガンダ装置として総力戦体制に組み込まれていったのかを、貴重な資料の渉猟を通じて実証的に分析しているのである。

具体的には、本論文は、新聞統合のプロセスを、統合に向かう背景条件が整う満州事変前後の1930年代前半、統合が始まる日中戦争勃発前後の1930年代後半、統合が進展するアジア・太平洋戦争開始直前の1940年代、統合が完成されるアジア・太平洋戦争開始後の諸段階に分け、それぞれの段階に特徴的な諸相を明らかにしつつ、新聞統合がいかに構想され、完成されていったのか、そのプロセスの総体を描いている。本論文の最大の意義は、何よりもこれまで実証的に全体像が描かれてきたとは言い難い、総力戦期の新聞統合の具体的な展開を、詳細な資料の発掘を通じて実証的かつ歴史的に明らかにした点にある。この点で、本論文は、これまでの戦時期のメディア史研究や戦時期研究に裨益する学術的研究として高く評価される。

ただ、全体として新聞統合の過程を歴史的な順序に従って論述しているため、統合の諸段階のダイナミックな力学を、ヴィヴィッドに描き出せてはいない点は惜まれる。また、資料が主として生き残った地方紙の側のものを中心としているため、淘汰された側の視点や新聞社ごとの多様性についての分析やや弱くなっている印象もある。新聞統合が著者のいうように利益の保全という経営的な観点に促されていたとしても、結果的にこの統合が政党政治に終焉と並行して起きたことのイデオロギー的な意味についてはなお洞察を深めていく必要がある。

だが、このことによって、本論文の学術的意義が揺らぐものではない。これまで十分な研究がなされてこなかった重要なテーマである新聞統合について、その全体像を詳細な資料調査を通じて明らかにした価値は大きく、本論文は、博士論文に相応しい水準に達しており、博士号を授与するに十分に値するものであるとの認識で審査委員全員が一致した。以上より、本審査委員会は、本論文が博士（社会情報学）の学位に相当するものと判断する。